

児童の心理的特性と親の養育態度、感覚教科目の好悪、 成績との関係—一次集計による基礎的考察—

○梅 津 迪 子
(女子聖学院短期大学)

心理的特性 感覚教科 成績の好悪 適応性 親の養育意識
本研究の趣旨

子どもをとりまく環境は、社会的、文化的影響を受け、情報の氾濫による教育への関心、親の養育意識や行動の変化、生活様式の相違、価値観の多様化をもたらしている。

このような状況下では、自ら思考し、判断し、選択し得る能力が要請されてくるので、学校は勿論、家庭、地域社会において子どもの内部にある生きる力、学ぶ力を育成することが望まれる。

このような能力は、感覚重視の教育において培われると思われる。

ここでの感覚は、たんなる生理学的意味にとどまらず、それは自己と環境の真摯なとりくみ、即ち社会的意味においてである。

一般に今日の風潮は、「知、徳、体」の調和のとれた、人間形成の重要性は指摘されながら、いつのまにか受験体制の綱の目にくみこまれ知育偏重の傾向を招いている。

これは、親の養育行動が起因していると思われる。

換言すれば、親は偏差値社会に向けて子どものパーソナリティを方向づけているといえるのである。

1. 研究の目的

一次集計による基礎的考察として

- 1) 親の養育意識、行動、態度、が成績にどのように、関連しているか。
- 2) 各教科目における好・悪と、得手-苦手との関係。
- 3) 感覚教科目の成績と親の養育意識との関連の有無。

2. 方法、期日、対象

- 1) 方法 新宿区立T小学校においてアンケート調査
- 2) 期日 昭和59年 6月と、中旬
- 3) 対象 表-1 参照

3. 内容

I 心理的特性	42問
II 適応性	28問
III 親の養育態度	18問
IV 教科目別好悪、得手-苦手	3問

4. 集計について

各項目ごとにカウンティングし、学年別、男女別、個人別に一覧表を作成し、一次集計を行なった。

結果と考察

I 児童の心理の発達の特徴について(図-1)

① 顕示性

学年が進むにつれて顕示性が高くなり、女子より男子にその傾向がみられる。

6年では男子が女子より10%多い45.5%であるのに対し、5年では男女差は4.4%である。

5年は、精神的状況が質的に変化する時期であり、委員会活動、クラブ活動等への活動範囲も広がり、高学年としての自覚や誇りも芽ばえるため、男女ともにどの学年よりも顕示性が高いのであろう。

② 攻撃性

この項目も高学年になるに従って高くなるが、顕示性と同様、6年よりも5年の方がわずかに高く、その差は男子2.2%、女子は8.8%差である。

攻撃性の内容も、年少者ほど喧嘩の頻度が多く、低学年では所有権の侵害によるもの、中学年では身体的攻撃によるもの、高学年では社会的名誉棄損がきっかけとなることが多い。

攻撃性は、女子よりも男子に多くみられるのは、それらに対する社会的許容度が女子より大きいためと考えられるが、ここでは5年女子が一番攻撃性が高い。

児童の心理的特性は、項目別分類をすると男子では顕示性、攻撃性、甘え、孤独、耐性、女子では達成動機、独創性、責任性、自主性の項目に分けることができる。

学年別による分類は、低学年において耐性がみられ、中学年では主体性、独創性、自律性、達成動機、高学年では判断力、責任性、劣等感の項目に分類できる。

低学年において

ゲゼルは、7才頃は自己を意識するようになり、身体的自我と関係する、また、静かに自己に専念する時期でもあり、沈思的でもあると述べていることや、この時期は、素直に親や教師の指導を受けとめる要素が強いことから、低学年における耐性がみられるのであろう。

中学年は、社会的順応性と社会的洞察力を習得してゆく時期であり、身体的にも活動性があり、勇気と大胆さがあるのもこの時期の特徴である。

そして、低学年より自我の外に出るようになり、個人差も大きく、性差も明らかになってくる。

また、蓄積された精力を奮い起し、エネルギーを注いで行動できることから、中学年に自主性、主体性、独創性の高いことが理解できる。

高学年では、児童期から青年期への移行期でもあり、いろいろな意味で、精神的状況が質的に変化ある時でもある。

同時に、今までより精神的に不安定な時期でもあることから、判断力や、責任性の心理的特性が逆に劣等感に変化することもあるのではないと思われる。

学年全体に、孤独、劣等感は低い傾向を示しているが、達成動機はそれらと対象的なカーブを描いている。

どの学年も55%以上であり、わずかであるが、男子より女子が高く、中でも3年女子の77.8%、4年女子の71%は著しい。

児童の心理的特性の全体像としては、甘えがなく、孤独感も少なく、主体性、劣等感、耐性、判断力、自律性は、ほどほどで、達成動機が高く、独創性に富み、責任感のある児童像となる。

Ⅱ 適応性について(図-2)

図-2は、児童の各適応性を学年別順位で示したものである。女子においては、学校への適応をのぞいて、教科、教師、家庭への適応の一位を3年が占めている。中でも特に教科への適応は89.9%と非常に高く、教師への適応も87.1%と高い。

同じように、3年男子に学校への適応をのぞいて、教科、教師への適応は70%以上となっている。教師への適応が高い中で、4年男子(45.7%)は、一位である。3年との差が24.2%である。

この時期は、自分自身をはっきり知るようになり、自我の外に出ることから、学校、学友、自分と家族、一般の文化に対する関係が形を変化させてくる。

しかし、その変化は、かすかに起るため、教師も親も、その重要性を十分把握することが出来ないことから、教師への不適応も生じやすくなるのではないだろうか。

男女別に考察すると、女子に各項目の適応性が高い傾向がうかがえるが、男女ともに、教科、教師に対する適応性は、各教科の好悪状態にも関連している。

Ⅲ 親の養育態度(図-3)

図-3において各項目の親の養育態度に男女差がみられる。点線は、得点の平均点、棒グラフは%を表わしているが、養育態度の受容的な点では、男女差はあるが、男女とも同じようなカーブを描いている。

その中で、特に3年女子が76.6%と受容的態度が高く3年男子も高いがその差は18.8%である。

②の民主的態度は、養育態度の項目の中で一番低いが、男女とも5年が特に低い、男子41.1%、女子は44.4%で平均以下である。

③の指導的養育態度は、高学年になるにしたがい高くなる傾向がみられるが、この項目も、特に5年の男女が、著しい。女子は74.4%、男子69.9%と民主的態度とは逆である。低学年と比較すると女子は13.3%、男子は18.8%差である。

このことは、将来の子どもに対する方向づけとして、進路の問題がからんでくるからであろう。

母親の受容的態度が、子どもに信頼の感覚を生み出し、その基盤があつてはじめて、外的な強制を伴うしつけが、子どもの内面的発達を生み出すといわれているが、受容的態度は男女差があり、男子にもほしい項目である。

全体に、親の養育態度を三つの側面から考察すると、いずれも女子の方が高いが、特に3年頃から性的差異が明らかになる時期で、同時に民族意識をもち始め、結婚、家族に関する事柄に関心を抱くようになる。この違いは、男子と根本的に違う所であり、女子に高いのは、養育態度が行動様式に重点をおいているからである。

Ⅳ 児童の教科目における好悪、成績の発達の特徴

1) 教科の好悪関係(図-4)

図-4は、各教科目における好・悪と得手-苦手との関係を表わしたものである。

いずれの学年においても、好悪の程度の高い科目は、男女とも体育であり男子8.6%、女子88%である。次いで図工の順であるが男子82%、女子84%とし位との差はわずかである。次に女子は音楽となるが、男子は理解の76%と、教科における男女差がみられる。

しかし、低学年においては、各教科間の好悪の程度は、差があまりみられず、教科目による男女差がみられる。

国語は女子の好きな教科であるが、男子は理科の方を好んでおり、好悪の程度はどちらも76%である。

学年差、男女差のない体育、図工に対し、男女差のある教科は音楽であり、男子より女子に好きな度合いが高く、どの学年も80%以上であるが、男子は全体に女子より20%低く、また学年差がみられる。

特に、4年男子の音楽は84%の高い率をみることができ、5年男子では58%に低下している現象がみられる。

同じように、女子における理科では、3年女子の86%の高率をみることにに対し、5年では58%となっていることである。

教科による学年差が著しくみられるのは、丁度学んでいる音楽や理科の授業内容、方法、指導者、受ける側の意識等が影響しているのであろう。

男女別好悪の程度は、教科別に高い順から、女子は図工、音楽、体育、家庭科であり、国語、理科、算数、社会となり、男子は図工、体育、理科、低学年では次に算数、音楽、社会、国語となるが、高学年では、音楽が最後になっている。

2) 教科の得手・苦手の関係について(図-4)

図-4からも、得手の度合いは好悪と類似したカーブを描いている。中でも、国語、算数、理科、体育は好悪の度合いと同じ傾向であるが、学年によって多少の差がみられる。

教科の好悪程度と同様に、得手-苦手の間合いも、男女差、学年差がみられる。音楽における4年男子は得手の間合いも同じ、女子の5年、6年は得手の間合いが低くなっている。特に好きな教科の図工で、高学年女子の得手度合いが低下しているのは、上記の音楽、理科等と同じ理由によるものであろうか。

上記のことからも、指導者、内容、方法、学ぶ姿勢等が教科の好悪状態に影響し、得手の間合いも高まり、変化するのであれば、教科へのたのしさ、学ぶおもしろさ、そして自ら求める学習へと発展していくに違いない。

図-4にはないが、5年から家庭科(女子)が加わる、6年になると男女必修となる。

家庭科の好悪の程度は、6年男子が64%であり、女子は92%と、教科の中で一番高い。

しかし、得手-苦手の状態は、6年男子58%、女子76%と、16%0差で低下している。

興味ある科目、好きな科目が必ず得意であるのではなく、技術を必要とするもの、個人の能力や意欲の程度、また、出来、不出来がはっきりするに従って、得手の程度が左右するのであろう。

男子の苦手な教科は、音楽、家庭科、国語の順であって、それは女子の得意な教科である。

女子の苦手な教科は、社会、理科、算数の順となっており、好悪、得手の程度の高い教科は、男女、各学年とも、図工、体育、音楽(男子はそれほどでもない)にみられるが、それは、動くたのしさ、創り出すたのしさ、思考しながら工夫し、自らの力で内部から活動できる教科である。そして、このことは生きる姿勢にもつながっていく。

教科による男女差は、2年から始まり、学年と共に差がはっきりとあらわれる。

神戸大学の心理学研究室による教科の好意度(1967年)によると、小学5年の家庭科は、好意度が低く、体育は左的的な高率であった。

そして、次に好意度が高いのは、体育との差が30%で図工、音楽となっている。

男子は、今回の調査と同じ傾向であり、特に女子に変化がみられたが、17年間における価値観、意識、社会状況の変化が、教科の好悪にも影響しているのであろうか。女子においては、特に親の意識、行動、態度が教科に反映されている。

それは、幼児期から器楽等の稽古ごとをする習慣が、音楽への好悪状態の下地を作っており、この習慣は男子にみられない。

また、女子は「家庭へ」といった親の意識が、家庭科への好悪も関係していると思われる。

しかし、同じ教科でも、学年による相違がみられることは、親の養育行動のほか、種々の要素が影響しているのであろう。

3) 特に感覚教育科目の好-悪、得手-苦手と親の養育態度との関係について

図-5, 表-2, 表-3 参照

学校教育の中で、特に感覚重視の教育の必要性をあげる観点から、図工、体育、音楽の三教科とした。

三教科上位成績者について、教科の好-悪、得手-苦手の程度、成績との関係、また、親の養育意識の関係について述べる。

三教科の成績上位者は、表-2にあるように、女子は全学年の13.4%、男子は10%であった。

成績上位者は、低学年では、教科評価3までのため、三教科とも3の評価の人。

評価1-5までである学年については、三教科が12点以上の人とした。

低学年では、成績上位者は男子の3倍も、女子が多く、感覚教科は(特に音楽で男女差があらわれているのではない)女子に多い。

成績上位者と親の養育態度の関連は、平均より①受動的②民主的、③指導的のいずれの項目も低く、関連は認められない。

あまり民主的でなく、受動的な態度も普通程度、そして、指導的でない親の像が浮かび上がるが、子どもに自由さを与え、のびのびとさせることが、このような結果を生むのであろうか。

感覚教科への好-悪は、体育の89%、図工86.9%音楽の77%となりやはり好悪の度合いは高い。

得手-苦手の割合は、好きではあるが、得意とまでは、いかず、体育81.9%、図工78.6%(好-悪の割合の差は8.3%)、音楽は67.2%(好-悪との差は9.8%)となった。

全体には、差が少ないことから、好きな教科は得意であるといえるであろう。

但し、教科内容の成就度によっても変動すると思われる。

おわりに

以上の結果は、一次集計による基礎的な考察の一部である。

各項目別による心理的特性は、家族形態によっても変化し、親の養育意識によっても影響を受けるであろう。

感覚教科の中でも男女差、学年差があること、親の養育意識が平均以下であっても、関連性がないのではなく、そのような意識が、むしろ、感覚教科の成績を向上させ、好-悪、得手-苦手の程度に関係しているのではないか。

別の観点から考察すると、親の価値観、重点のおき場所生きるために、人間のどこに目標をおき、心の糧を求めるかの姿勢にかかっているといえよう。

そのことが、子どもの発達に大きくかかわってくるであろうことがわかる。

特に、親の養育意識の中で受動的項目が高い3年女子に児童の達成動機が同じように高かったこと。

指導的項目が高かった5年女子に、児童の自律性、主体性の低さがうかがえたが、結論は二次集計に待たねばならない。なお、

その他、家族形態と心理的特性、項目別による児童の特徴、他教科と親の養育態度との関係等、二次集計の結果をまけて考察する。

表-1 調査対象(人数)

学年	女子	男子	合計
2年	42	54	96
3年	42	51	93
4年	44	52	96
5年	60	52	112
6年	65	60	125
	253	269	522

図-1 心理的特性(項目別一学年別)

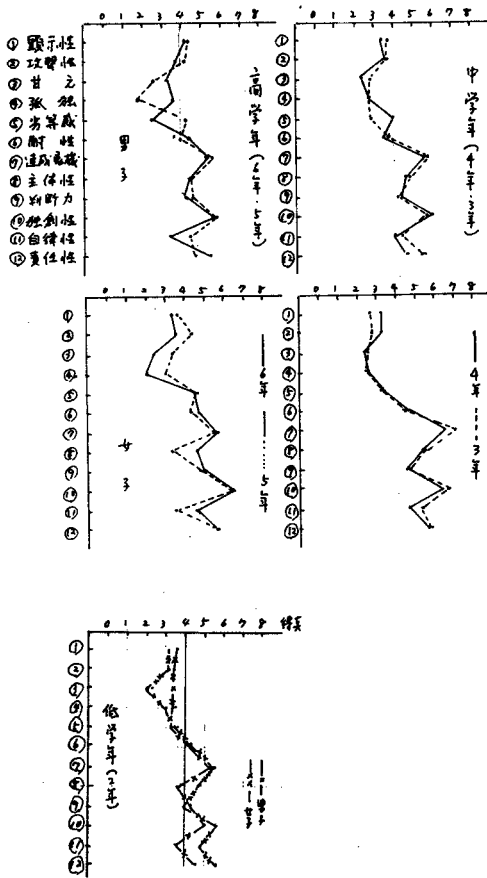


図-2 適応性

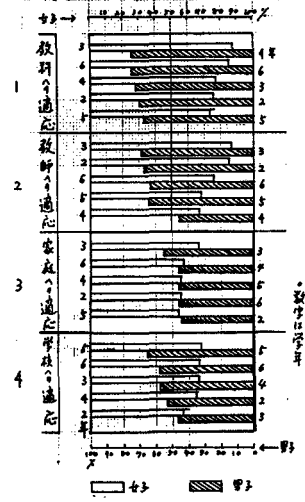
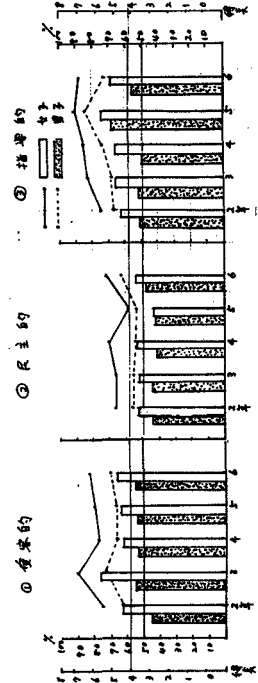


図-3 親の養育態度(学年別、項目別)



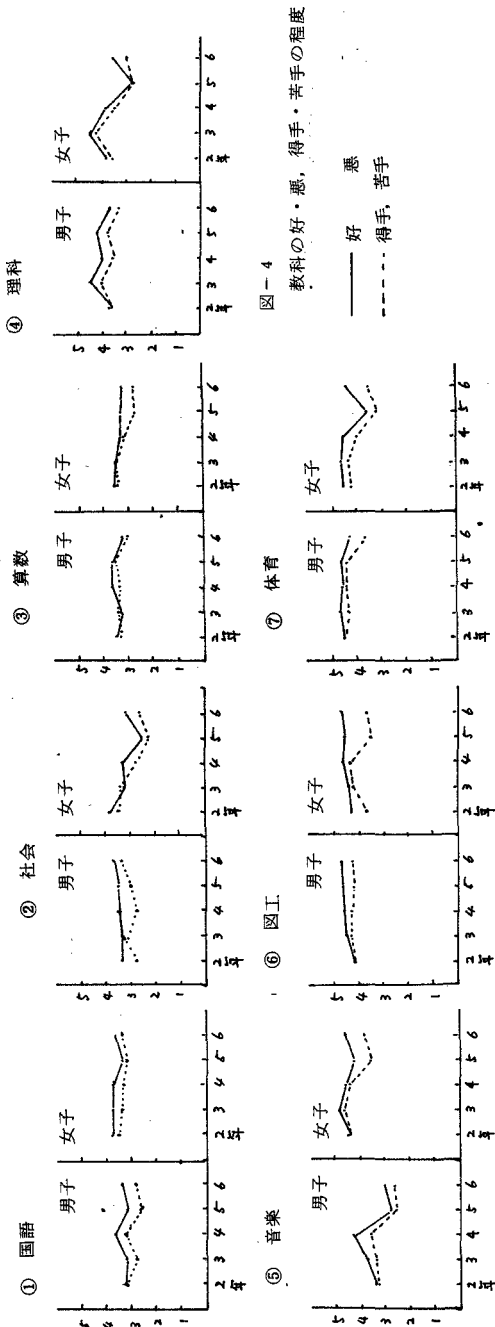


図-5 感覚教科上位成績者の親の養育態度

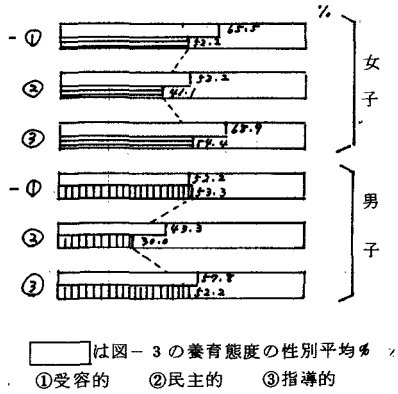


表-2 感覚教科成績上位者数

学年	女子	男子	計
2	9 (21.4%)	3 (5.5%)	12 (12.5)
3	7 (16.7%)	4 (7.8%)	11 (11.8)
4	7 (15.7%)	6 (11.5%)	13 (13.5)
5	6 (10.0%)	8 (15.4%)	14 (12.5)
6	5 (7.7%)	6 (10.0%)	11 (8.8)
計	34 (13.4%)	27 (10.0%)	61 (11.9)

表-3

感覚教科上位成績者による好悪、得手・苦手の尺度別分布表

項目	① 好			② 悪			③ 得手			④ 苦手		
	音楽	図工	体育	音楽	図工	体育	音楽	図工	体育	音楽	図工	体育
1	3 (4.9)	1 (1.6)	2 (3.2)	3 (4.9)	0	0	0	0	0	0	0	0
2	4 (6.2)	2 (3.2)	2 (3.2)	8 (13.1)	3 (4.9)	6 (9.8)	0	0	0	0	0	0
3	7 (11.0)	5 (8.2)	3 (4.9)	9 (14.7)	10 (16.4)	5 (8.2)	0	0	0	0	0	0
4	15 (24.0)	7 (11.5)	11 (18.0)	15 (24.0)	14 (22.9)	15 (24.6)	0	0	0	0	0	0
5	32 (52.8)	46 (75.9)	43 (71.0)	26 (42.6)	32 (55.7)	35 (57.3)	0	0	0	0	0	0
計	61	61	61	61	61	61	0	0	0	0	0	0

() 10%